

〈翻字〉九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』（仮称）【二】

吉丸, 志穂
九州大学大学院修士課程平成九年度修了

<https://doi.org/10.15017/10354>

出版情報：文献探究. 37, pp.38-50, 1999-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

〔翻字〕九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』（仮称）【二】

吉丸 志穂

本稿は、前稿（「文献探究」第三十六号 一九九八年三月）に続く九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』の翻刻である。凡例については前稿参照のこと。

なお、今回は紙面の関係上、巻二を二分し、二十八段までにとどめた。

〔翻字〕

十七【朱】

年比音信さりける人の

玄旨の説に、此段にむかしといふ字なし、書おとしたるか、又とし比はといふにむかしをもたせたるか、作者のこゝろ斗かたしと有り、今案するに書落したる成るへし、其ゆへは真名伊勢ものかたりにはむかしとし比と書たり、此贈答古今集にては春の部に入て恋の哥にあらざる故、あるしとあるも必女と見ざる事也、此物語にては、あるしは女と見て恋の哥とみるへし、とし比音信さりけるとは、此女のあたることをうらみて男のはさるなるへし、其心女の「1オ」哥に見へたり、とし比はお

とつれされ共、花にめてとひ来る時女のみて出せる也、此人誰ともなし

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待けり

花はちりやすく、うつろひやすきものなれば、あたる名にたつとはよめり、貫之集の哥に、あたるれと桜のみこそふるさとのむかしなからのものにはありけれ、此哥にて心得へし、あたる名はたちたれ共、年にまれなる人をまちつくれば、其人よりはあたるらすとや、久しくとはぬ男を恨て、わか身を花にたとへてよめる也、此贈答古今集春上に入たり、1ウ

けふこすはあすは雪とそ降なましきえすは有とも花とみましや

此返し、返しに三つあるの一つ也、よみかけたる哥のことにはにやらすして一向別のことをいひて返しとする躰也、業平は返しをよくしたりと基俊卿もいへり、此哥の心、けふ来ればこそありしなからのさくらとも見れ、あすは木のものとの雪とふりて消すしてありとも、花とはかみんとかみの心也、けふ来つる故にあたるらすとも人にははすれ、あす来らはあるしの心替りて如此あたるらすとはいはれじとの心なり、けふといひあすといふは、必詭てみるへからず、此哥新「2オ」古今比多く本哥にとられたり、後鳥羽院の御哥に、けふたにも庭をるさかりとうつる花消すは有とも雪かともみよ、定家卿、庭の面に消すはありとも

花と見る雪は春までつきてふらなむ、同郷の哥、花さそふ庭の
春風跡もなしとは、そ人の雪とたに見む

十八【朱】

昔なま心ある女有けり

なま心とは好色の心をいへり、なまといへるはもの熟せざる心
なれば、色を好む心のいまた熟せずとみるへきにや、源氏物語
に、なま／＼のかんたちめといへるに同じ、2ウ「至て色を
好む人は色を好こと面に見へず、如此男の心をひき見むと思ふ
は好色の心のなま／＼しきといふ心にや、なましる成る心とい
ふ説は少し心得かたし、此女とあるは小野小町也とむかしより
いひ傳へたれ共、誰ともしらする事也、業平の隣家に住て、も
とより女も好色の名ある人なるに、業平の方よりおとつれさる
故、其心をひき見んとて、菊の花のうつろへるを折て哥を送れ
る也、うつろふとは白き菊の霜なと経て、紅にうつろひたるを
いふ成るへし、3オ」

くれなゐに匂ふはいつら白菊の枝もとを、に降かともみゆ

此句ふは朝日影匂ふなといふに同じく、艶の字に見るへし、白
菊の霜を経て紅に匂ふといふは、いつれの所をいふへきにや、
た、此花は白ゆきの枝もたは、にふりてあるよとはかり見ゆる
との心也、とを、は、たは、といふに同じ、枝のたはむ心なり、
紅の色を好色にたとへ、白き色をこのまさる人の心にたとへて
見るへし、業平の色このみの名あるは何事そ、我隣にあれ共、
音信さるをもつて見れば、色このみといふはそらことならんと
の心也、3ウ」

おとこしらすよみによみける

紅に匂ふかうへのしら菊はおりける人の袖かとも見ゆ

業平の心に、わか心を引みるといふ事はよく知りたれ共、しら
すかほにた、菊の事をのみ返しによめる心、至極の好色のしは
さ也、我心のさたをは一向不言してよめる所面白し、此業平の
哥に對してみれば、女の方は好色の心未みぢく成りといふへし、
哥の心、もとより白菊の霜にうつろひて紅に匂ふは、この花を
折たる人の袖もかくやと思ふとの心也、女の哥に、少しも心を
動すしてよめる所面白し、宗祇4オ」の説に、匂ふかうへと
いふは紅にしろきかかさなりたる様には見るへからず、その上
にといふ心なり、紅に匂ふ所もあり、又もとよりの白菊なる所
もありてはへある色なるを、折さる人の袖におもひよそへてさ
こそ其人の袖もうるはしかるらめと思ひやりたるまで也、さき
の哥にあらそはさる所、心を付て見るへし

十九【朱】

昔おとこみやつかへしける女の

宮つかへしける女とは、染殿の後の御方などにめしつか（マツ）わる
ゝ女中なるへし、古今集による時は4ウ「此女は紀有常か女
なり、此段は作り物語にて、古今集を正説とすへし、或説に、
宮つかへしける女とあるを、そめとのゝ后と見る説はいかゝあ
らん、皇后の御事ならば女とは書へからず、こたちはめしつか
はるゝ女房の事にて、染殿の後の女官といへ共、此段の文法を
考ふるに、宮つかへする人のもとに又めしつかふ女などのもと
に、業平の通ひたる事と見るへきにや、古注による時は、業平
も此女もともにそめと、（マツ）后につかふる時の事と見へたり、業
平は忠仁公の家礼なれば、染殿5オ」の后にも宮つかへし給

ふ成るへし、是古注の趣也、好む所に随ふへし

ほこもなかくかれにけり

男のしは／＼かよひて遠さかりたれ共、同じ所に宮つかへする人ゆへ、女のめには男をみれとも男はひたすら女をわすれてとりあはさることを、あるものかとも思ひたらずとは書り、世にあるものとも思はさる心也、此贈答古今集恋五に入たり、こと書に曰、業平の朝臣、紀有常か女にすみけるを恨る（ママ）とありてひるは来て夕ざりは帰りのみしければよみて 5ウ」つかはしけると有り、是は有常か女のはらには子とも有たれば、離別の後に其家に出入したることなるへし

天雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめには見ゆる物から

なりゆくかはうたかひにあらず、成り行かなと見るへし、天雲は天雲也、雨雲と見るは悪し、よそといふへきまくらことはに多く万葉によみたり、まくらことはなから末まで其ことをうけてよめること、萬葉古今以来あまたある事也、天雲は空たかく行雲ゆへ目には見ゆれ共、取もとよめす 6オ」次第に遠さかりてはて／＼は消行ものなれば、おりふし男を見なからわか方に心をよせさることを恨てよめる歌なり

あま雲のよそにのみしてふることはわか入山の風はや（補入）みなり

古今集には、行かへり空にのみしてとあり、ふることよは月日をふる心也、此ふるといふことにはにつきて雨雲と見る説は悪し、女を山にたとへ、我身を雲にたとへたる哥也、雲は山におりあるものなれとも、風烈しき時は空にのみたよふことく、そなたにも人を通はず故、わかためにあしければ 6ウ」その人の

もとによりつかすとの心也

とよめりけるは

是はわかある山の風はやみといふ心を、作者の釈して、此女のもとにこと男の通ふ故、それを恨て男の行さる心をよめる也とかけり、今案するに、真名伊勢ものかたりには、あまた男ある人といひけるとあり、今の本、あの字を落■（右傍二「した」ノ字）るにや

二十【朱】

むかし男やまどにある女をみて

此段は業平宮つかへをやめてしはらく大和の國にすまれし時の事などにや、大和にある女は 7オ」誰といふ事をしらす、奈良の京にすめる人なるへし、この女をけそうして逢たる後、ほともなく又宮つかへせんとて都に帰らるゝ時の事也、宮つかへする人とは、もとより朝廷につかうる人なればかくは書り、帰りくる道とは帰京の道中也、やよひはかりは弥生のほとといふ心にて、やよひの時節をいふなり

かえてのもみちの

かへての紅葉とは、牡丹花の説に若葉の色こき也と有り、玄旨も此説おもしろしと 7ウ」の給へり、わくらはの事にはあらず、いまの八しほなといへる楓のことく、春の若葉はあかきものなる（二字補入）ゆへ紅葉とはいへり、信実の哥に、春かけて葉さき色つく若楓さもあらしを何いそくらん、此哥なども春の若葉のあかきものをいへり、此楓のもみちを折て帰京の道中より女のもとにたはふれいひやりたる也、実に女の心かはれるをうらむるには非ず、たゞたはふれにいひやりたと見るか

たしかるへし、君といへるは、 8オ」則女の事也

君かためたる枝は春なからかくこそ秋の紅葉しにけり

君かためと思ひて手折れる枝の、春なからかくもみちしたるは、君か心にわれをあくといふ心のある故、かくは時ならず色づくにやといふ心也、肖柏説には、女の心をうた(二字、「あた」ノミセケチ)かひていひなせるとあれとも、こゝはたはふれにいひたる心にみるへき(「し」ノミセケチ)にや、後拾遺集藤原兼平朝臣の母の哥、住人のかれ行宿は時わかす草木も秋の色にそありける、 8ウ」此哥も、四月はかりにまゆみのみちを見て男のもとによみておくれ(「な」ノミセケチ)る哥也、此物語より後の事ながら合せ見るへし

返事は京にきつきてなん

返事、かへりことゝよむへし、たゞし堯孝も折々へんじとよまれた(補入)るよしいひ傳へたり、男の道々返事をまちたるに、ほど遠き所なれば、京に来つきて後返事は来つる也、君かさとゝ返事によみたるに相應せり

いつのまにうつろふ色のつきぬらん君か里には春なかるらし 9

オ

哥の心、いまた春なるにかくのごとく楓のうつろひたるは心得かたき事也、思ふに、君かすみ給ふ里には心の移ふ色なる秋のみありて、人をめくむ春といふことのなき里ゆへに、如此うつろふ色の有ならんと、男のうたかへる心をおし返して、こなたよりうたかひたる所おもしろし、わか里にすみ給ふうちは、如此うつろふ心もなかりしに、帰京し給ふと其儘其心のうつろふたるは、其里に春はなくして秋のみあるゆへならんとよめる所

かの江南 9ウ」の橋を江北に移せはからたちとなるといへるもろこしのたとへに同し

二十一【朱】

むかし男女いとかしこくおもひかはして

此段は、女の心あさく堪忍なきことを書たり、はしめの段にては、むかへて妻とせし女の、男の家を出たる様に見ゆれ共、おはりの段におのか世々になりけりと書たるを見れば、おつとの家むかへたる女にはあらざること(「ると」ノミセケチ)しられたり、かしこく思ひかはすとは、よく思ひあひたる事をいふ也、末に變する 10オ」ことのありしをいはんため也、こと心なかりけり(「る」ノミセケチ)とは、男の心に異心なき事をいふ、然るを女の心にいさゝか男をうらむる事有りて、男の手をはなれ、外にかくれんと思ひて此哥をよみて物にかき付おきたる也、世の中をうしと思ひてとあるは、男を恨むる心より世をうきものにおもふ心也

出ていなは心かるしといひやせん世の有さまを人はしらねは

此家を出て外にかくれなは、さそ心のかるしき事に人のいひなすへし、人にしられ 10ウ」ぬうき事のありて此家を出るといふ事は、誰にもかたらさることなれば、人はよもしらしとの心也、此哥をよみおきてやかて外にかくれたる也、萬葉集の哥に、世の中をうしと思ひて(「て」ノミセケチ)家出せしわれやかへりて何にかならん

けしう心をくへきこともおほえぬを
けしうとは、万葉集に殊の字、異の字をけとよめり、如此女の
家出をすへきほどの隔心有へきにあらすと、男のあやしむ也、

とみかう 11オ みとは、かなたを見、こなたを見て、女の
出行し跡をしたふ心也、萬葉に左右と、「に」ノミセケチ書
てとにかくにとよめり、こ「た」ノミセケチ、も左の方
（「万」ノミセケチ）を見、右の方を見る心に心得へし、いつ
こをはかりとは、はかりはかきり也、いつくをかきりに尋ねん、
よしなき躰也、源氏夕かほの巻に、いつこをはかりとかわれも
たつねんとあるに同じ

思ふかひなき世なりけり年月をあたに契て我や住みし

女を思ふかひなき事をいへり、多くの年月あたに契りてはずま
す、いかはかり女をふかく思ひしもの 11ウ をとの心也、
如此なかめ居たる後又よめる哥、左のことし

人はいさおもひやすらん玉かつら面影にのみいと見へつゝ

人はいさとは、人は女也、女の心にわれを思ふか思はさるはし
らされ共、われはひたすら其人を思ふゆへ、家出をせしのうちも
猶、面かけに見ゆると也、玉かつらは面かけといふに多く萬葉
につけてよめり、萬葉の哥に、人はいさ思ひやむとも玉葛か
けに見へつゝわすられぬかも、此哥を少しとり直して入たる成
るへし、 12オ 此物語の哥は、新勅撰集恋（「恋」ノミセ
ケチ）五によみ人しらすと入られたり

この女いとひさしくありて

女の心浅きゆへ、一たひ家出はせしかとも、又男をしたふ心有
りて男の方よりおとつるゝかとまち見ても音信なきゆへ、おも
ひ侘てこなたより哥をよみておくれる也、源氏は、木々の巻品
さため所合せ心得へし

今はとて忘るゝ草のたねをたに人の心にまかせずもかな

男の心に今は是までと思ひ切りて、われをわす 12ウ るゝ
草のたねをまかせぬ様にしまほ（右傍二同字有り）しきとの心
也、此哥も新勅撰集恋五によみ人不知と入られたり、返しの哥
は續後撰集恋五に業平と入られたり

忘（右傍二同字有り）草うふとたにきく物ならば（「に」ノミセケ
チ）思ひけり（右傍二同字有り）はしりもしなまし

女の哥に、男の心にわすれ草をうへさる様にといへるをうけて、
わすれんと思ふはわすれす思ふ心のあるゆへなれば、わか方に
わすれ草をうゆると聞たまはゝ、必我をわすれさると思（同字
ミセケチ）ひ給へとの心なり 13オ
またありしよりけにいひかはしておとこ

此男女一たひは遠さかりたれ共、むかしよりも猶ふかくいひか
（「の」ノミセケチ）はして、男の通ひた躰也、其時男のよめ
る歌、左のことし

わする覽と思ふ心のうたかひにありしよりけに物そかなしき

此哥新古今集恋五に二首ともによみ人不知と入たり、女の心に、
我心にわするゝことのあらんかとうたかふ心ある故、一たひ家
出をせし人なれば、いまむつまじくなりてもなを、その心をつ
のみかたくてうたかひ思ふ（「ひ」ノミセケチ）との心なり
13ウ

なかそらに立ゐる雲のあともなく身のはかなくも成にける哉

此哥は、女の心に一たひ家をうかれ出、又立帰りてむつまじく
はなりたれ共、男の心にはしめのことを思ひてわれをうたかふ
ゆへ、たとへは中空にたゝよふ雲のことく心もさたまらて、は
てははかなくやならんと、わか身のあやまりを思ひ、男の

心をたのみなく思ふ躰なり

とはいひけれと

とはいひけれとゝは、如此たかひにいひかはして 14才」むつましきやうなりしかとも、もとより女（「め」ノミセケチ）の心浅きゆへ、はて／＼は、男はことつまをむかへて、女は異夫にしたかひて遠さかりはてたると也、後撰集の哥に、笛竹のものとふるねはかはるともおのか代々にはならずもあらなむ

二十二【朱】

むかしはかなくて絶にける中

さしたる恨なと有りて絶たるにはあらず、かりそめの事にて逢ことの遠さかりたるをいふ也、されは猶やわすれさりけん 14ウ」とは書り、一度は絶たる中ながら、猶女のかたもとの契を忘れずして、此哥をよみておくれるなり

うきながら人をはえしも忘れねはかつ恨みつゝ猶そ恋しき

此哥、新古今恋五よみ人不知と入る、哥の心、中絶たるはうきながら、猶其人をわすれねは、かつはうらめしと思ひ、又こひしく思ふとの心也、えしものしの字は休め字也

されはよといひて男 15才」

されは、女の心に同じく男もしか思ふとの心也、文のことは成るへし、拾遺集の哥に、かたきしのまつのうきねも忍ひしはされはよつみにあらはれにけり

あひみては心ひとつをかはしまの水のなかれてたえしと思ふ

此哥、續後撰集恋四題しらす業平朝臣とあり、かはしまは河のなかにある嶋なり、心をかはずといはんため也、哥の心、逢みそめしより後、たかひの心をかはしてむつましかりしに、かく

遠さかりたれば、今より 15ウ」後はその河しまの水のこと

く、一度は左右にわかれなかるゝとも、末はひとつに成りてたかひの契たゆましきとの心也、千載集の哥に、君に（補入）のみしたの思ひはかはしまの水の心はあさからなくに

とはいひけれとその夜いにけり

前の哥は、行末のあらましを契りたる哥なれとも、女の心のかはらぬ聞にたへかねて、其夜行てあひしとの心也、されは、いにしへ行ききの事もかたりあかして 16才」猶あかぬ心に次の哥をよめる也

秋の夜のちよを一夜になすらへてやちよしねはやあく時のあらん

此哥六帖にはむすひ句恋はさめなんとあり、秋のよのなかきを、千世あはせて一夜になしてねたり共あく時はあらし、ましてや一夜の契りはなこりおしきとの心也、やちよしのし字は休め字也、萬葉集の哥に、此よはのはやくあくればすへをなみ秋のもゝよをねかひつるかも

秋の夜のちよを一夜になせりともことは残り（補入）て鳥や鳴なん

16ウ」

此哥、續古今恋三よみ人しらすとあり、たとへ秋の夜のちよを一夜になしたりとも、たかひに思ふ事はいひも尽さず、言葉残りて鳥の鳴時節にならんとの心也、下の句、心やさしき哥なりいにしへよりも

あはれは、日本紀、萬葉集等に阿恰と書てあはれともおもしろしともよませたり、互にふかくおもひあひたる中をいはんとて、一たひ絶たる中なれ共猶むかしより 17才」あはれにてかよひけるとは書り

二十三【朱】

むかし中わたらひしける人の子とも

此段は作り物語なり、業平の御父は阿保親王におはしませは、田舎わたらひせ^{まて}せ給ふへき人にあらず、是にて此段のつくりものかたり成る事をするへし、殊に末に至りては、いよ／＼作り物語の趣と見へたり、いなかわたらひとは、京にすむ人の田舎にゆきて物などあきのふことをいふ也、大和ものかたりに、とし比わたらひなと 17ウ」もいとわろくなりてとかき、源氏物語夕^負の巻に、なりはひもたのむ所すくなく、いなかのかよひもおもひかけねほどかける、皆同じ心也、みつねか家の集に、玉くしけふたみの浦にすむあまのわたらひくさはみるめ也けり、日本紀に活の字をわたらひとよめり、活計の心也、此男女の親いやしきことをいはんとてかくは書出したるや

井のもとにいて、あそひけるを

子ともは必井のもとにあそぶものなれば 18オ」かくはいへり、末につゝいつのとよめる哥を出さんためにことほりたる也、はちかはしてとは、はしめは男女ひとつにあそひたれ共、漸おとなしくなりて、男は女をはち、女は男をはつる躰也、たかひにはつれ共、心には夫婦にならんと思ふ故、おやのこと人にある也、となりの男とあれば、たかひのおやの家軒をならへし所と見へたり 18ウ」

つゝ井づの井つゝにかけしまるかたけすきにけらしな見さるま

つゝ井とはつゝをまるくしたる井也、井けたなともなくたゝ丸

きつゝのみしたる井也、是もいやしき人の門などにある井の躰

也、つゝ井のいつゝと心得へし、中のつの字は休め字也、兼盛家の集に、わか恋はつゝゐのはまと成りななん心をくみて人はしるへく、此つゝ井のはまは地名なるへし、三井寺のほとりにもつゝいといふ所ありてそこにすめる法師を筒井の浄明とはいへり、哥の心、男女いときなき時井のほとりに遊びて、たかひのたけを井つゝに 19オ」くらへて見し「へて」ノミセケチ」ことありと見へたり、久しく對面せさるうちにわかたけもその井つゝよりはるかにたけたかく成りたる事をいひて、いまは夫婦に成るへきことを下に思へる哥なり、まろは上代、男のみつからをいふことは也、未夫婦にはならされ共、つまと思ふゆへいもとよめり、たゝし萬葉には妻ならさる女をもいもとよめること多し

くらへこしふり分髪もかた過ぬ君ならすして誰かあぐへき

是もいとけなき時、たかひの髪をくらへて見たること 19ウ」有し成るへし、ふり分かみとは、子とものかみを云也、万葉に放髪とも振分髪とも書てふりわけかみとよめり、はなちのかみともうなゐはなちともよめり、萬葉の哥に、乙女らかふり分髪をゆふの山雲なかくしそ家のあたり見ん、皆童男童女のかみの事也、哥の心、たかひの髪をくらへし時は短かかりし髪、今はかたに過てなかく成りたれ共、君ならてはたれか此髪を手にふれてあけんとの心也、あぐるはゆふ心也、是を髪あけとも髪そき 20オ」ともいへり、女の髪を男のあぐることならねとも、他人に手もふれさせしとの心にてかくはよめる成るへし

なといひ／＼て

此哥のみにかきらすより／＼いひよりてつみに夫婦と成りたるなるへし、拾遺集の哥に、世中をかきいひ／＼てはて／＼はいかにや(補入)いかにならんとすらん
年比ふるほとに

是より末いよ／＼つくり物語なるへし、こゝ 20ウ」に書たる男の心、業平の心にあらず、古今集龍田山の哥左注にも業平とかゝす、大和物語にも大和の国葛城の郡にすむ男と有りてす、忽に此男は大君なりけりと書り、彼はあはせ考るに、業平にあらざることもあきらか也、むかしは女の家をわか家とせしゆへはしめは女に親もありてその家まつしからさりしか、おやなどうせてのちまつしく便りなきゆへ、もろともに貧家にあらんよりはとて男は河内国 21オ」に通へる也、これらの事業平の心にあらざる事分明也

かうちの国たかやすの郡に

是は河内国高安の郡に富める家ありて其家の女に男のかよへるなるへし、末に家子(ケコ)の器にとかけるもめしつかふものなどあまたある躰なり、はしめの女はひん家なれとも心やさしく河内の女はとめる家なれ共心いやしきことをあはせみるへし
このもとの女 21ウ」

このもとの女とは大和の也、六帖にたつた山の作者をかき山の花の子と書たり、此花子心うつくしき人にて、ねためる心なく男を出したてゝ河内へ通はすゆへ、男の心のあたるにひきくらへて、女もこと心有りてねたますわれを河内へやるにやとうたかひ、其不義を見出さんとて河内へ行まねして千載チサイの中にかくれて見たる也、人をうたかふ罪一つ、我不義を以て人の不義

を見頭はさんと思ふ罪二つ也、しかれ共、かの女貞女なる故其徳のちにあらはれたるなり 22オ」

いとよりイトヨリけさうして

おつとの留守にけそうするにて男の心にいよ／＼不義ありと思ふ躰也、しかれ共女の心はおつとの留守とてもかたちをみたりにせざる事女の礼也、河内の国の女の男の見ざる時いひかひとりてはしたなきすかたをなしたるにあはせ見へし、古今集には此時琴をひきたるとあり、大和物語にはかなまりに水を入れてむねにあてたるか湯になりたるとあり、いろ／＼に切なる心をかたりつたへたるなるへし 22ウ」

風吹はおきつしら波たつた山夜はにや君か独こゆらん

此哥古今雑下よみ人不知とあり、六帖第一雑の風に出せり、又第三山の部にもせたり、風ふけは波のたつゆへ龍田といはんために三の句はもう(「う」ノミセケチ)けたる也、万葉集第一の哥に、わたつみの沖津しら浪龍田山いつかこえなんいもかあたり見ん、この哥も伊勢の国山邊の御(ミ)井にてよめる哥と有り、此哥にて興津しら波はたつといふ縁言なることをしるへし、しら波をぬす人の事と心得て此龍田山によるは盗人 23オ」などのあらんことを氣遣たる心に見る説も古き説なるへし、拾遺集の哥に、ぬす人のたつた山の山にいりにけり同しかさしの名もつらし龍田の山の夜半のしら浪、これら皆ぬす人の事なれ共定家卿頭昭の説を感じて盗人の説を用ひられされはたゝ男のさよふかく此山を越て行事をかなしめることにみるへし、恨むへき男を不恨、たゝ其夜行をなけきたる所貞女の心也、此哥

一首にて男 23ウの心をさへあらためさせたる事はかたき事なり

かうちへもいかす成にけり

其夜河内へ行んとおもひたれ共此哥に感してその夜は不行、其後河内はかれ／＼に成りて折節行ゆへ、男の来たる時は心にくきさまにかたちをもつくりて見ずれとは男の見ざる時はうちとけていやしきわさをもなす躰なり

手つからいゝかいとりて

いゝかいは飯をもる器也、和名抄にヒ和名賀比と有、 24

オ」けこのうつはものとはけご家来の事也、とめる家なから其心いやしきゆへめしつかふものともくわする飯を手つからもり居たる躰也、大和の女の男の留守にけそうしたるにあはせ見るへし、大和物語に此時の事をかけるに、あやしきさまなるきぬを着て大櫛をつらくしにかけており、手つから飯もりおりけりとあり、さまあしき事をかゝんとてかくは書れたるなるへしさりければかの女

此さまあしきを見て、もとよりまれ／＼にかよふ男の 24

ウ」うとみはてゝ其後は絶て不行ゆへ、此河内の女男のすめる

大和の方を見やりてよめる哥也、伊駒山は大和河内のさかひ也、此哥は万葉十二に出たる歌にて新古今集恋五によみ人不知と入たり、古哥を取合せて書たるなるへし

君かあたり見つゝをゝらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも

見つゝをのは休め字也、哥の心、君かすむ大和の方はそなたそと見ておらんとするに国境成るいこま山に雲のかゝりてきたかに見へさるゆへ、たとへ雨はふるとも必此いこま山を雲なか

くしそとよめるなり、 25オ」万葉にはみつゝもおらんと有り、定家卿此哥をとりて、伊駒山いさむるみねにゐる雲のうきと思ひのはるゝ世もなし

からうしてやまと人

如此口すさみてあけくれいこまの方をなかも居るほどにやう／＼として男の来らんといふさたあるゆへ悦て待に、たひ／＼不来ゆへ此哥をよめる也、此哥は新古今集恋三によみ人不知と入たり、季吟抄に古今集の哥と有るは誤り也

君こんといひし夜毎に過ぬればたのまぬ物のこひつゝそふる 25

ウ」

君の来らんといふたひ／＼に待てとも来らさるゆへたのまざるものから猶さりともおもひてこひつゝあまたの年月をふるとの心也、たのまぬものゝといへることはおもしろし、古今集、うつ蟬の世の人ことのしけゝればはわすれぬものゝかれぬへら也とよめるに同じ、如此よみて男を恋たれともつゝに其男の不来と也、ふたりの女の賢愚を合せ見るへし、この哥、新古今集にはたのまぬものゝ恋つゝそふりゝとあり、ぬるといひふるといひ心同じ 26オ」

二十四【朱】

昔男かたみ中に住けり

此段もまつは作り物語なるへし、しかれ共哥の返しなど男の心やゝ業平の心に似たり、かたみ中に住けりとは都につかふる人のしはらく都にすみて妻などもうけたるか又宮つかへのため

に都に行て三とせか間音信なかりしなるへし

三とせきりければは待わひたりけるに

令に曰、其夫外蕃に（右傍ニ「他国の事也」ノ書キ入レ）没落
（右傍ニ「死す事也」ノ書キ入レ）するもの子あれば五年にし
て嫁をあらため、子なければ三年にして嫁をあらたむるといへ
り、かやうの事にて三年まで 26ウ」は此女も男の帰るを待
たれ共音信なきゆへ、此ころ年比にいひよる人に對面せんと契
りたるなるへし、烏丸家本には（「も」ノミセケチ）契りたり
ける（「り」ノミセケチ）をと有り、いまたその男には逢され
共約速せし、もとの男の来りて門をたたくゆへ門の（「を」
ノミセケチ）戸を不明して此哥をよみて出せるなり

あら玉の年の三とせを待ひて只こよひこそ新枕すれ

此哥は續古今集恋四よみ人不知と入る、あら玉はこの字のまく
らことは也、あたらしき玉は 27オ」砥にてみかきて光りを
出すものゆへとといはんとてあら玉とはいへり、いまた新枕せ
しにはあらね共男の三年までおとつれざるを恨て三年までは待
たれ共其かきりあることなればこと人と對面するゆへ男に不逢
との心なり

あつさ弓まゆみつき弓年をへて我せしかことうるはしみせよ

如此女のつれなきことはを何ともとりあはてやはらかに答へた
る所、業平の心なるへし、あつさ弓ま弓つき弓とかさねたるは
27ウ」三とせといはんため也と古注に見へたり、今案する
に是はつき弓のつきを月にとりなして年つもりて月となり月つ
もりて今日に成りたる心にも見るへきか、拾遺集の神楽の哥に、
弓といへはしがなきものをあつさ弓ま弓つき弓品こそあるらし、
此哥を取てよめるなるへし、わかせしかことはわかせしことく
也、うるはしみは日本紀に善の字をうるはしとよめり、哥の心、

わかそなたと年へてむつまじかりし 28オ」ことく今の男と
そなたの間むつまじかれかといへる心なり、女の心みじかく
嫁をあらたむるも不恨してその女のためによからむことを思へ
る所心切也

いなんとしければ女

如此よみて男の帰らんとする故女も男をしたひて次の哥はよめ
る也

あつさ弓ひけとひかねと昔より心は君によりにし物を

男の哥に弓にたとへてよみたれば女も弓によせてわか心をあら
はせる也、此哥も續後撰集恋三よみ 28ウ」人不知と入、哥
の心、君か心はにわれにひきもせよひかすもあれ、わか心はむ
かしより君によりしものをと也、弓はひく時にわか方にもとす
糸のよるものゆへかくはよめり、古今集の哥にも、あつさ弓ひ
けはもとす糸わか方によるこそまされ恋の心は

女いとかなくしてしりにたちてをひゆけと

女の哥に、心は君よりにしものをとよみたれ共後の男有りと聞
てかたらふへきにあらされは男の帰りたるを、女は男をしたひ
て其跡に 29オ」たちて追ひ行たれ共行糸のしれさるゆへ、
行つかれ息もくるしければおりふし清水のある所にて水をむす
はんとて立よりたるに、やかてそこにうちふしてむなくなり
たる也、かなしき事のかきりをいはんとてかくはかける成るへ
し、し水ある所なればそのほとりに岩などのありしに筆墨もな
きゆへゆひをくひ切りて此哥を書たる也、是もいたりてかなし
き事を書くつくり物語の躰と見るへし

およひのちしてかきつける 29ウ」

およひはこよひ也といふ注はあやまり也、和名抄に小指をはこ
およひと書たれはおよひとはかりいふ時は小指にかきるへから
す

あひ思はてかれぬる人をとゝめかね我身は今そ消はてぬめる

あひ思はてとは女は男をおもへとも男の女を思はずして立ざり
たるをとゝめかねて今此所にてむなしくなるとの心也、古注に
はつるとはまことに死するにはあらておもひの切なるをいふと
あるは心得かたし、そこにいたつらになりけるといへるもそ
の清水のほとりにてむなしく成りたる心也、 30才「死する
ことをいたつらになるといへる例、古今集、夏虫の身をいたつ
らになす事つひとつ思ひによりてなりけり、謙徳公の哥に、あは
れともいふへき人はおもほえて身のいたつらに補入成ぬへ
き哉、元真集に、恋わひて身のいたつらに成ぬともわするなわ
れによりてとならば、皆是死することをいたつらといへり、清
水のある所に臥すといひゆひ血にて哥をかくなどいへる、皆死
ぬへきさまを作り出たることは也、わか心のあさきゆへ三年の
後早く人に逢んことをゆるし元の男の心さしふかきを聞て進
30ウ「退極まりこゝにむなしく成りたる躰、おろかなからも
あはれ成る事なり

二十五【朱】

昔男有けり、あはしともいはさりける女

此女とさせるは古今集による時は小野の小町也、あはしといは
ずして又さす逢あひまことをはゝかる所色このみのしはさ也

秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはてぬるよそひちまさりける

此哥古今恋三業平と入る、古今には、逢はてこし夜そとあり、

心同し、但し古今による時はあはすして帰る恋成るへきか、此
物語にてはたゝ不逢恋の 31才「様にきこゆれ共女の返しに
てみれはたひ／＼ゆけ共對面せさることゝきこへたり、哥の心、
秋といひあしたといひ野へのさゝ原といひ露けきことのかきり
をいひたてゝ其露を分たるよりも人に不逢して帰る袖はぬれま
さるとの心也

みるめなき我身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる
此返哥には二説あり、みるめなきとは見ることのなきを海のみ
るにそへたる也、わか身は男の身をさしていへり、浦といふに
うらみをかねたり、かやうに男のあしたゆきまてかよへとも對
面せさるはその男を恨むる 31ウ「心あるゆへ不逢をわか身
に恨ありとは不知してあしたゆきまて通ひくるとの心也、うら
みをうらと斗よめる哥、後撰に、なかれてはゆくかたもなしな
みた河わか身のうらやかきりなるらん、昔家万葉に、わひわた
るわか身のうらとなれゝはや恋しき人のしき波にたつ、又一説
此わか身とあるは女の身なり、後水尾院御説にも男の身といふ
説は悪しと書せ給へり、みるめなきとは女のかたちの見る所な
きをいふ、わか身の見にくきはちて不逢ことをは不知してあ
したゆきまて 32才「通ひ来り、はてはわれを恨むることよ
との心也、此説、あはしともいはさりける女のさすかなりける
といふにかくかなへるか、此哥も古今集に入りて二首共に題し
らすと有り、古今にては贈答の哥あらずと見へたり、二説心は
かはれ共みるめなき浦にあしたゆきまてあまの通ふことによそ
へてよめるは同し、このむ所にしたかふへし

二十六【朱】

昔男五条わたりなりける女を

五条わたりなる女とは二条の後の御事也、但宗祇并禅閣御説にはたれともなし、此こと書説々あり、32ウ「二条の後の御もとへ通ふことを得ざる時思ひなきて男の居たるを中たつ人のとひたる時男のよみておくれる哥と見る説諸説のうちによろし、此中たつ人を染とのゝ后と注したる説は甚悪し、誰とは不知、此二「一」ノミセケチ」とを中たつ人のその事ならざるをともになきていひおくれる時よめる哥なるへし、此哥は新古今集恋の五よみ人不知と入られたり、此集には中たつ人の哥と心得てよみ人不知と入られたるにや、又古今にもこの集の哥を業平と不書してよみ人しらすと 33オ「入たるも例有り、其心にや、撰者の心斗かたし、哥も此集にてさま／＼の説あり、袖にみなとのさはくらしと書たる本もあり、又、袖になみたのと書たる本もあり、さはくかなと書たる本もあり、一決しかたし、袖の湊は袖になみたのかゝることにて名所とも見へす、哥枕等には筑前に袖のみなと有りといへともおほつかなしおもほえず袖にみなとのさはくかなもろこし舟のよりしはかりに おもほへすは思ひかけす也、もろこし舟とはつねにより来らざるものなれば思ひかけなく人に「一」に「ノミセケチ」とはるゝ事を 33ウ「たとへていへるなるへし、よりしのしの字は添字に非ず、より来りしなさけによりて我か涙のしきりに袖に落る事を唐ふねをよするみなとに波の立さはく如くなりたとへてよめる哥也、如此我か人を多すなりてなかく事をとはれんとは思はさりしに思ひかけなくとはれしはかりに、袖になみたのかゝる事みなとにさはく波の如し」てたとへてよめるとみるへ

し、此袖にみなとゝいへるを中古より袖のみなとゝよみなしたる哥多し、新古今集、かけなれて宿もる月かな人しらすよな／＼さはく袖のみ 34オ「などに、續古今集、人しれぬ袖のみなどのあた波は名のみさはけとよるふねもなし、又袖のみなどを名所による 哥、寛喜四年三月廿五日石清水若宮哥合信實、したさはく高瀬の川の波まより霞みや袖のみなとなるらん、高瀬川は河内也、高瀬のよと同し、いさよひ日記遠江国高師の浦にて、我ためや猶もたかしのはまならん袖のみなとの波はやすまて、是等にて筑前の名所に非ざる事知るへし

二十七【朱】

昔男女のもとに一夜いきてまたもいかす成にければ 34ウ「

はしめてかよひたる男の又行さるは女のふかくはちて物思ふへき事也、後朝に文なきをさへ清少納言にはむねつふるゝ事に書たり、業平の一夜行て又も行さる事をふかく女の思ふ折から、此女のもとに来りてひそかに女のていをうかゝひ見たる也、ぬきすとはたらひの上にすをあみてかけをくもの也、貫簀と書く延喜式にも出たり、竹をあみてへりをさしたるもの也、うつほ物語に、白かねの御たらひ、ぢんをまるにけつりたるぬきす、白かねのはんそう、しろかねのすき箱と有、むかしは沈にて 35オ「も作りたるにや、大方は竹を細くけつめてあみてへりをさしたる也、是をたらひにわたしてその上にて手あらふ事也、水のしつこの水にほとはしらしめぬため也、萬葉集の哥に、いにしへの人ののませるきひの酒やもはらすへなぬきすたまはん、此女の躰、たらひにむかひてあらひたるかぬきすを打やりたればたらひの水に我影のうつりたるを見てよめる哥也

我はかり物思ふ人はまたもあらしと思へは水の下にも有けり

我はかりは我ほとに也、我物思ふ顔のたらひの水に 35ウ

うつりたるを見て我ほと物思ふ人はあらしとおもふに此たらひの水そこにも物思ふ人は有けりとよめる也、我影を他人の様にいひなしてともに物思ふ事によめる、面白し、その物思ふといふは男のひと夜来りて又も来らざるをはつかしくも思ひくやくも思ふ心なるへし、古今集の哥に、ふたつなきものと思ひしをみなそこに山のはならで出る月かな、又貫之集屏風の繪に、女とも川のほとりにあそぶ所を、わか身またあらしと思へと水そこにおほつかなきはかけにや 36才」はあらぬ

とよむをかのこさりける男

こさりける男とは一夜行てまたも不行といふにかけて見るへし、彼の男こよひは来りて此躰をうかゝひ見てよめる哥也

みな口に我や見ゆらんかはづさへ水の下にてもる聲になく

女の哥に水の下にもとよめるは我身の事なるを男は我かけの水にうつりたる事になしてよめる也、哥の心、物の心知らぬ蛙さへ水口にてひとつなけは多くの蛙もろこゑになくもの也、されはその 36ウ」水そこのかげは我影にてわかそなたを思ふよりそなたにも物思ひて同じ様に音になくは水口の蛙も水そのの蛙の諸声に鳴に同じとの心也、水口とは田へ水をせき入る口なり、女の哥を請てよめる所、心を付て見るへし

二十八【朱】

むかし色このみなりける女

心仇なる女の男の家を出てこと方にたるを恨てよめる哥なり

なとてかくあふごかたみに成にけん水もらさしと結びし物を

なとてかくは何とて如此なり、逢ふこは逢期なり、 37才

あふ事のかたきをかたみといふにつけたり、玄旨の説に、あふこをかこによせてよめりと云説はあやまりなるへし、かたみといへる則籠の事也、かこのかたみとはつゝくへからず、かたみのことはつゝくへし、後撰集の哥に、むすひ置しかたみこたになりせは何に忍ふの草をつまゝし、かたみはかこたれは汲たる水のそれにのこらぬ事をいはんとて上はつゝけたる也、水もらさしとちきりし中の今は跡なくなりたるはかたみに汲める水ののこらざるかことしと也、また男の家を出て行たるをかこより水のもる 37ウ」事にもたとへていへるなるへし、後撰集の

哥に、うれしけに君かたのめしことのははかたみにくめる水にそ有ける、又今葉集の哥に、逢ふ事を今はかたみのめをあらみもりてなかれん名こそおしけれ

(よしまる しほ・九州大学大学院修士課程平成九年度修了)